

Style

4

日常から減災へ 思いをつなぐ



五条小学校で開催された収容避難所開設・運営訓練の様子(2010年11月)

誰もが等しく、将来の被災地・被災者になり得る日々を生きています。上町台地も例外ではありません。

日常から非日常を見つめる手がかりの一つに、数々の被災地で培われてきた智慧を丹念に紡いだ一冊のストーリーブック『いのちをまもる智慧を伝える 減災に挑む30の風景』があります。そのころを上町台地で受け止め、その日に思いを馳せます(10)。

二つ目の手がかりは、もしもの場面に身をおいてみることのできる減災ゲーム「クロスロード」です。お寺や神社が並ぶあのまちで、多文化が息づくあのまちで、長屋が残るあのまちで…、さまざまな声と動きが芽生えます(11)(12)。

三つ目の手がかりは、暮らしのそばの“避難所”体験。減災まちづくりへの確かな一歩です(13)。

(10) ウィンドウ・エキジビション03「『いのちをまもる智慧』を伝える 減災に挑む30の風景と上町台地災害史」(2007年9月3日～12月28日 ※2008年1月18日まで展示延長)、(11) ウィンドウ・エキジビション06「減災ゲームで気づく 上町台地の暮らしいろいろ」(2008年9月16日～2009年1月23日)、(12) ウィンドウ・エキジビション09「減災キャラバン on 上町台地」の道程から」(2009年9月7日～2010年1月29日)、(13) ウィンドウ・エキジビション12「上町台地 もしも・いつもの“避難所”ウォッチング」(2010年9月13日～2011年1月28日)をもとに構成。

Style 4 日常から減災へ 思いをつなぐ

1 風土特性と災害リスクに 思いを馳せる

水の都大阪は、古くから洪水や津波による被害を受け、火事や地震などの災害にも見舞われてきました。

なかでも、幕末の1854年(安政元)には、大地震が2日のうちに連続して発生し、2度目の地震の直後には山のような大津波が市街に押し寄せました。戸外に避難していた多くの人々が大波にのまれたのです。

周囲より高い位置にある上町台地でも、近年に至るまでに何度も台風の直撃や集中豪雨などの風水害にあり、時には甚大な被害を受けています。また、住宅や商家が密集する大阪市街地は度々大火に見舞われて、その炎は幾度となく台地の上にも燃え広がりました。

こうした災害は決して昔の話ではありません。大阪平野を南北に貫く上町断層帯が地震を引き起こした場合、そのマグネチュードは7.8にもなると推定されています。過去の事例から得るべき「智慧」は、まだ多く残されているのです。



NEXT21/U-CoRo ウィンドウ・エキジビション 06「減災ゲームで気づく 上町台地の暮らしいろいろ」で展示した上町台地の立体模型(土地の特徴や起伏がよく分かるように、垂直方向に15倍の比率にしています)。



1863年(文久3)の大火による被害状況(右が北、大阪市立中央図書館蔵)



室戸台風(1934年9月)被災後の復旧が進まず、校庭で授業(大阪城天守閣蔵)

上町台地周辺の災害略年表

BC1万年前後	この頃、上町台地が動いた可能性
686年1月	大蔵省の失火により難波宮全焼
1361年6月	近畿に大地震(四天王寺金堂倒壊)
1562年1月	大坂本願寺大火、寺中2,000軒焼失
1580年8月	石山合戦の和睦後、本願寺は失火により焼失
1615年5月	大坂夏の陣にて、大坂城炎上
1724年3月	大坂大火(妙知焼、市街の2/3、12,205軒が焼失)
1757年9月	安堂寺橋付近より出火し、谷町まで焼く
1783年12月	内平野町で出火(1,500軒焼失)
1789年12月	南本町より出火(寛政の大火、上町まで57町を焼失)
1852年12月	上町で大火(東横堀川から谷町まで焼失)
1863年11月	大坂大火(新町焼、市街の2割焼失、玉造稲荷神社も類焼)
1868年1月	大坂城焼亡 5月 淀川大洪水
1884年1月	内本町で大火(曲焼、火は松屋町を越える)
1912年1月	南の大火(難波新地一帯が焼け、4,576戸焼失、生國魂神社類焼)
1934年9月	室戸台風襲来(四天王寺塔や木造校舎など倒壊、死者1,812名)
1950年9月	ジェーン台風襲来(生國魂神社本殿倒壊)

大阪平野の変遷



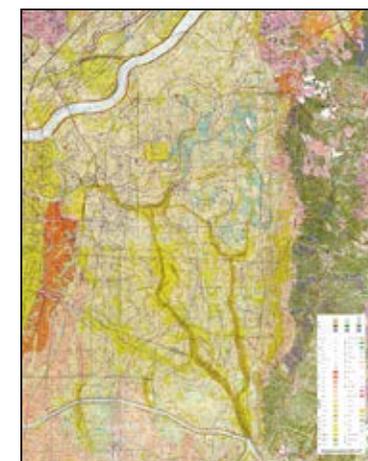
上町台地の成り立ちと災害リスク

縄文時代から古墳時代までの大阪平野の変遷図を見ると、平野部の大半が陸地化してから間がないことがわかります。また、上町台地とその東側の河内平野を範囲とする土地条件図では、中央部を走る黄色の帯から300年前に付け替えられる前の旧大和川河道が浮かんできます。さらに、平野部には自然堤防と呼ばれる微高地が点在し、昔の村はその上に立地していることも見えてきます。

こうした土地の履歴を念頭に置くと、ハザードマップの見方も違ってきます。例えば、比較的地盤がしっかりしていると言われる上町台地上でも、震度分布に細かい強弱があることがうかがえます。また、内水氾濫時の浸水予想図では台地上にもわずかながら浸水が予想される地域があります。その背景には台地を刻む数々の谷、埋め立てられた池やくぼ地など土地の履歴も影響していることが分かってきます。「上町台地だから大丈夫」と過信せず、愛する土地であるからこそ、その変遷を見つめ直し、そこで暮らしていくための覚悟と工夫を怠らないようにすることが肝心ではないでしょうか。



「続大阪平野発達史」(梶山彦太郎・市原実、1985年)の資料ほかをもとに作成

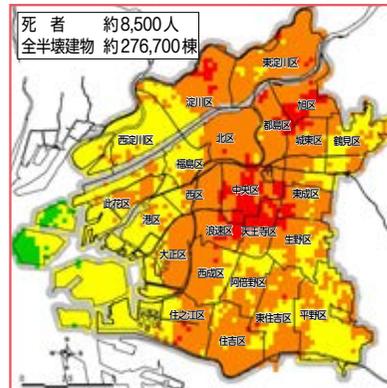


現在の土地条件図(国土地理院)

大阪市に 想定される地震の被害



上町断層帯地震 マグニチュード/7.5~7.8 計測震度/5強~7



資料図出典：大阪市ホームページ <http://www.city.osaka.lg.jp/kikanrinishitsu/page/0000011946.html>

生駒断層帯地震 マグニチュード/7.3~7.7 計測震度/5弱~6強



中央構造線断層帯地震 マグニチュード/7.7~8.1 計測震度/4~5強



東南海・南海地震 マグニチュード/7.9~8.6 計測震度/5弱~6弱



生駒断層帯地震は生駒山地西側を走る断層帯での地震、中央構造線断層帯地震は和歌山県との県境に横たわる和泉山脈南側の断層帯での地震、東南海・南海地震は紀伊半島・四国沖でのプレート型地震をそれぞれ想定しています。上町断層帯地震では台地西側直下が震源となるため、台地上も赤色やオレンジ色の部分が多くなっています。

ハザード・マップをよく見ると、台地上でもいくつかの色の違いが見られます。その背景には盛土地や平坦化地など人為的な土地改変の歴史も含まれます。

※ハザード情報は2013年2月時点のものです。被害想定は見直されますので、ご注意ください。

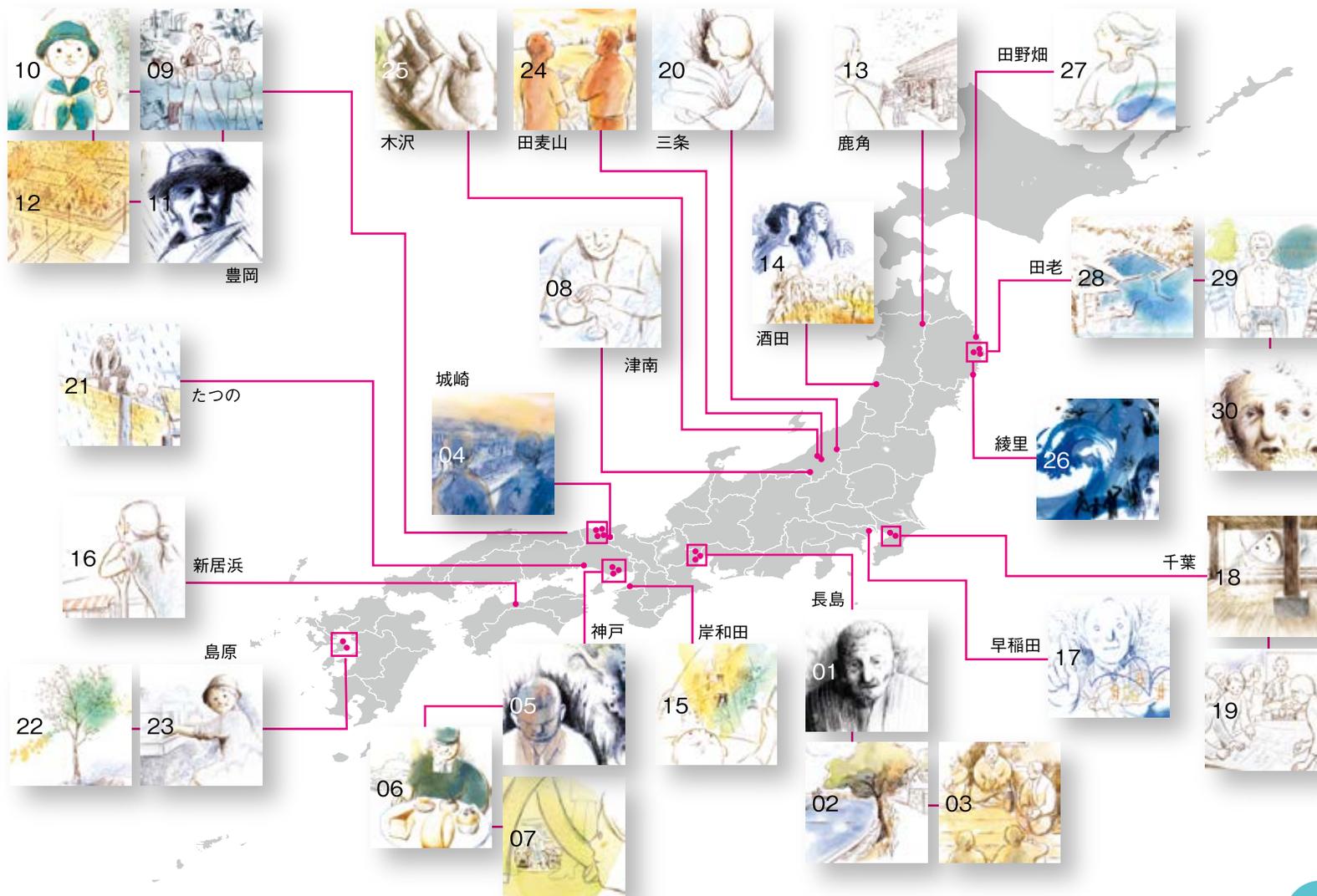
『いのちをまもる智慧 減災に挑む30の風景』

「日本列島を襲う相次ぐ災害から、どうすれば難を逃れることができるのか。また、実際の災害現場で被災者はどのようにしていのちや暮らしを守ったのか」

(特活)レスキューストックヤード(RSY)は、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センター(CSCD)などとともに、昔から現代まで災害に遭った全国各地の現場から、減災にまつわる30のエピソードを取材し、『いのちをまもる智慧』という冊子に編集しています。

減災に挑む30の風景

- | | | |
|----------------|------------------|--------------------|
| 01 伝えられる言葉を学ぶ | 11 そばにあるものを使う | 21 みんなで持ちよる |
| 02 風景に智慧を宿す | 12 地域の特性にあわせる | 22 100年先を想う |
| 03 日頃より苦楽を共にする | 13 自然に逆らわず受け流す | 23 災わいと共にある恵みに寄り添う |
| 04 愛される景色を築く | 14 町の顔を守る | 24 故郷の美しさを知る |
| 05 ただそばで耳を傾ける | 15 歴史をたぐる | 25 掌の力を信じる |
| 06 資源を発掘してつなげる | 16 互いに息を合わせる | 26 自分の身は自分で守る |
| 07 様々な目線に立つ | 17 非常時に向けた日常を楽しむ | 27 手をさしのべる |
| 08 覚悟を決めて生きる | 18 学びを地域に活かす | 28 あらゆる方法で防ぐ |
| 09 記録し検証する | 19 暮らしの場をよく知る | 29 設備や情報に頼らない |
| 10 大きなスケールで考える | 20 場所を地域へひらく | 30 ずっと語り継ぐ |



語られているのは、人がいかに生きるかという“智慧”そのもの

この事業は、日本全国で度重なって起こる災害の中で培われた智慧を多くの方々と共有したいという想いを出発点に始まりました。各地へ向う人々が語る災害の体験に丹念に耳を傾けて集められた智慧は全部で30にも上りますが、そこで語られていたのは小手先の“技術”でも、すぐに使える“情報”でもなく、まさに人がいかに生きるかという“智慧”そのものです。

生死を分ける局面で獲得された様々な智慧を、次の“いのち”をまもるべく活かすには、1人でも多くの人の手で未来へ紡がれることが大切なことです。しかし調査報告書という形だけで出来事が語られてしまうことで、人々がその時に感じた恐怖や憤りや悩み、愛や喜びや悲しみがどこかにすっぽりと抜け落ちてしまうのではないのでしょうか。「防災」というたった2文字でくられてしまうことで、あまりにもたくさんの物語と温度を持った人の姿が隠れてしまうことがあります。

この『いのちをまもる智慧』では、そんな様々な智慧を「報告書」という形で客観的に眺めるのではなく、もっと人の感情に近い方法、人の温度が抜け落ちないような「物語」で伝えていこうと取り組んでいます。

それぞれの智慧が教えてくれる真意を丁寧に見つめ、その中に潜む普遍的なメッセージを拾い上げながら、ストーリーとイラストで綴りました。そして特定の地域だけでなく、誰もが学ぶべき智慧のタイトルとして表現し、本の最初の物語に「伝えられる言葉を学ぶ」を、最後の物語に「ずっと語り継ぐ」を持ってくることで、過去から紡がれている智慧を未来へと届けていくメッセージを持たせています。

ここに出てくるキャラクターは実話をもとに構成されているものも、完全にフィクションのものもあります。ただ大切なのは物語の中で交わされた会話が「事実」かどうかではなく、その場で人が何を感じて、そこに現れた風景から何を学ぶのかということだと考えています。

今までは情報や技術だけで語られてきた「防災」の2文字。この「災い」という文字と「防ぐ」という文字の間に隠れてしまった風景を描くことで、はじめて“いのちをまもる智慧”として未来へ紡がれていくのではないかと私たちは信じています。

花村周寛
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター デザイナー
(現在は大阪府立大学准教授)

『いのちをまもる智慧 減災に挑む30の風景』(2007年3月30日発行)

監修:『いのちをまもる智慧』制作委員会
発行:(特活)レスキューストックヤード
編集・企画・構成・アートディレクション:花村周寛
編集協力:大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 渥美公秀/関 嘉寛/菅磨志保、名古屋大学 宮下太陽
ストーリー・タイトルコピー:花村周寛 イラスト:中村 妙 取材・解説文:吉椿雅道

(特活)レスキューストックヤードのウェブサイトには、『いのちをまもる智慧』の概要が紹介されています。
<http://www.rsy-nagoya.com/wisdom/>
また、同サイトで、『いのちをまもる智慧』の本を購入することができます。
http://www.rsy-nagoya.com/eccube/html/products/detail.php?product_id=11&PHPSESSID

comment

Style 4 日常から減災へ 思いをつなぐ

3 減災ゲームで その日その時に身を置く

「クロスロード」は、文部科学省の「大都市大震災軽減化特別プロジェクト」の一環として開発されたもので、2004年7月に「神戸編・一般編」が完成。その後、「市民編」ほか別バージョンもつくられています。



※制作・著作：Team Crossroad (網代剛、吉川肇子、矢守克也：50音順) 「神戸編・一般編」「市民編」は京大生協ブックセンターで購入できます。 TEL.075-771-7336 http://www.s-coop.net/rune/bousai/

減災ゲーム「クロスロード」(CROSSROAD)とは？

「クロスロード」は、災害時の対応をシミュレーションするカードゲーム。災害への備えは、まず災害を想像することからはじまります。災害が起きたとき、自分や家族がどのような状況に置かれ、どんな決断をすることになるでしょうか…。

Crossroadは分岐点

ゲームは簡単。数人組で、災害時に会おうシナリオの設定に、YESかNOで答えます。その際、YES・NOどちらが多数派になるかを予測してカードを出すのが基本ルール(自分の意見を示すルールのとくもありません)。多数派に、得点の青い座布団がもらえます。ただし、全員同意のときは、みんなが無得点。さらに、ただ1人の少数意見だった場合は、その人だけが得点し、金座布団が手に入ります。

得点すれば座布団ゲット！

このゲーム、やってみると、けっこう盛り上がりです。なぜ大多数が(自分が)そうすると考えたのかを互いに説明しているうちに、自然と議論が深まっています。どの問題にも正しい答えはありません。自分とは異なる価値観があることにも気づかされます。

「クロスロード 神戸編・一般編」の設定は、阪神・淡路大震災で対応にあたった神戸市職員の体験がもと。たとえば、「あなたは行政の担当者。人数が用意できない緊急食料を、それでも配る？」など、どれも難しい判断を迫る問題ばかり。多くの人なら(自分なら)どう決断する？ うーん、決められない、でもどちらかのカードを出します。

では、選ぶのはどっち？

多数派が得点！

結果 Yes 6 × 4 No

優先順位はやっぱり「目の前の人」になるんじゃないかな。

子どもはいないけれど、「自分も母親なら」と思うとすごく悩んだ。

助けるにしても助けられないのでは、自分の子どももきつたれにも助けてはもらえないはず。

「母親」という設定だからNo。これが「父親」だったらYes。自分は父親だけれど、「母親なら」と悩んだ末のNoです。

助けるにしても助けられないのでは、腹が据わらないとダメだと思った。

わが子優先

結果 Yes 6 × 4 No

A班 yes 3 : 2 no B班 yes 3 : 2 no

上町台地境界5カ所で「クロスロード」を実施

「ゲーム」をきっかけにして、減災・防災のことをみんなで考えてみませんか

減災・防災は、自然対人間の対決だと思っていませんか？ もちろん、そのような一面もあります。でも、気象予報の仕組みの整備、堤防の建設や建物の耐震化など、災害に対する備えがある程度できた社会では、減災・防災は、むしろ、人と人との関係づくりと深く関わってきます。たとえば、ふだんのお付き合いのあり方が、いざというとき、瓦礫の下からの救援活動に大きく影響したという話を、よく耳にします。お年寄りや障害をもった方などに対する災害時の支援をどうするのかについて、地域の自治体と地域の人の意見が大きく食い違っているようでは、災害時が思いやられます。それに、うちの街では、減災・防災より防犯や環境問題の方がもっと切実、という意見もあるかもしれません。これらのことは全部、人と人との関わり方の問題です。減災・防災と「ゲーム」が結びつく理由は、この点にあります。「ゲーム」を通じて、また、「ゲーム」をきっかけにして、減災・防災のことを、ふだんからみんなで考えてみませんか。

comment

矢守 克也 京大防災研究所巨大災害研究センター准教授 (現在は教授・センター長)

クロスロード in からほり・練

上町台地境界 減災ゲーム ドキュメント 2008年7月4日

お屋敷再生施設「練」に、長屋再生グループ・からほり倶楽部メンバーやテナントさん、近くの高校の先生など10名が集まりました。クロスロードの標準キットの中から、無作為に3つの問いを選びました。



空堀商店街境界

戦災や再開発の波をくり抜いてきた路地と長屋のまちには、人のつながりも色濃く残っています。先人が伝えてきた暮らしや街並みを活かした長屋再生事業も進んでいますが、風情ある路地のなかには行き止まりのところもみられたり、老朽化した木造建築も目に付きます。また、路地と長屋がワンルーム・マンションやコイン・パーキングに替わってしまい、街並みと地域コミュニティも昔とは様変わりしつつあるようです。

問 あなたは、母親

大地震後、小学校に行っている我が子を迎えに行くが、途中で人が生き埋めになっているのを見発見。他に人はいない。しかし、我が子も気になる。

まず目の前の人を助ける？

結果 Yes 6 × 4 No

優先順位はやっぱり「目の前の人」になるんじゃないかな。

子どもはいないけれど、「自分も母親なら」と思うとすごく悩んだ。

助けるにしても助けられないのでは、自分の子どももきつたれにも助けてはもらえないはず。

「母親」という設定だからNo。これが「父親」だったらYes。自分は父親だけれど、「母親なら」と悩んだ末のNoです。

助けるにしても助けられないのでは、腹が据わらないとダメだと思った。

わが子優先

結果 Yes 6 × 4 No

A班 yes 3 : 2 no B班 yes 3 : 2 no

路地・長屋が残る境界で 減災を考える機会に

六波羅雅一さん からほり倶楽部代表理事

減災ゲームの体験機会を古いお屋敷を再生した「練」2階のサロンdeありすで持つことができました。当日は長屋再生に取り組みからほり倶楽部のメンバーだけでなく、テナントの方や近隣の学校の先生など多彩な顔ぶれに集ってもらえました。

ゲームでは回答が半々に分かれたり、1対多数に分かれたり、また同じ答えでも理由が違ったりと顔ぶれ以上に一人ひとりの多様さを感じられました。これが実際に危機的状況のなかでは「多様さ」などと言っておかず、即断即決しなければならぬので大変です。

減災ゲームは楽しくそうしたことを考えさせてくれる、それもみんな一緒にという機会づくりにとても有効でした。路地と長屋が残る風情ある空堀商店街境界。そのまちを地域のみなさんとともに未来へ継承していくためにも、減災ゲームを通じてみんなで考える機会を作っていければと思います。

上町台地境界で、さまざまな団体が 減災イベントを展開。

NEXT21/U-CoRoと協力関係を持つ人や団体による減災や地域コミュニケーションの活動が、2008年から2009年にかけて上町台地境界で広がりをみせました。「いのちをまもる智恵」を伝える」や減災ゲーム「クロスロード」に関するキーパーソンの方たちが重要な役割を果たし、こうした動きから、2009年2月に展開された「減災キャラバン on 上町台地」へとつながっていきました。

防災てらまちトーク 上町断層から「防災」を考える ～減災コミュニティと寺町

主催：三帰会 / 2008年11月7日 / 会場：應典院1階研修室(天王寺区下町1) 講師：菅 磨志保さん(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師)



下町は、上町断層のすぐ近くに数多くの寺院が並ぶ地域。いつ起こっても不思議でない大地震に対し、日頃から自分たちのこととして備えておくことの大切さを再認識しました。

※それぞれの談話は2008年8月時点のもの。肩書、所属等は当時(イベントは開催時)のものです。



五条界限

JR環状線内でも人気の住宅地である五条界限。神社の夏祭りや地藏盆を地域で盛り上げるなど、町会やPTA、防災リーダーなど住民の多彩なネットワークが今もまちを支えています。大きい戸建て住宅や低層マンションが目立つ地域ですが、表通りから少し入ると路地や蔵があったり、上町台地の東麓へ流れる谷筋と出会ったりもします。一方、人気の住宅地でもあることから、超高層マンションの建設も進み、人口が増えています。

地域の仲間と面白くて良い体験ができた!

談 富士原純一さん (有)富士原文信堂代表取締役

お互いに気心も知れ、日頃から地域行事や自主防災訓練などで一緒に行動している「天王寺区赤十字奉仕団地域防災リーダー(五条災害救助青年部)」のベテラン隊員5名で減災ゲームを体験しました。災害に対する意識も知識も少なからず持ち合わせているという自負もあって、当初は減災ゲームに対しての関心もあまり高くはありませんでした。しかし、実際に減災ゲームをはじめてみれば「おや?今までの防災研修とは違うぞ!」と感じたようです。共通の知識を持ち、思考形態も似たもの同士でありながら、減災ゲームでは真っ向から意見が食い違いはじめます。防災意識があるがゆえに深く考えすぎたり、ゲームとして他者の裏を読んでみたりと勝手が違ったようです。ですが、そこは気心の知れたメンバー同士。ポケありツツコミありとさすが大阪のおっちゃんたち(!?)、和やかに進められました。みんな「面白くて良い体験ができた」やて!

クロスロード in 上町台地界限 減災ゲーム ドキュメント 2008年8月9日

天王寺区南部の住宅地・五条界限。将軍地藏尊の地藏盆や五條宮夏祭りなどみんなで支える行事も数多い地域の住民5名が集まりました。クロスロードの標準キットの中から、無作為に3つの間を選びました。

問 あなたは、30代の夫婦

ようやく手に入れた新築マンション。何度もショールームに通って吟味したインテリアに二人とも大満足。しかし、大地震が起きたら家具が倒れるかもしれない。

格好は悪いが耐震金具を家具につける?

結果 Yes 2 × No 3

デザイン重視で選んだ家具はきっと大事だろうから、地震で壊れないように取り付けると思ったんだけど。

耐震とか免震とか言ってるけど、地震は揺れてみないと分からないよね。

最初に取り付けても、1年も経てばきつと外してしまおうよ。震災を経験した人でも、何年も経てば備えがゆるくなる場合も出てくるし。

地震の経験がないか、免震だから揺れないと思ってれば取り付けられないだろうね。経験があれば、恐くてデザインどころではないはずよ。

新築マンションだから、免震構造になっていたり、家具も据えつけタイプだったり、丈夫な造りになっているのでは。業者さえしっかりすれば(笑)。

クロスロード in 上町台地界限 減災ゲーム ドキュメント 2008年7月30日

松屋町筋と上町台地西崖の間にお寺が建ち並ぶ下寺町の應典院。演劇やアート活動をサポートするスタッフや幼稚園の先生など5名が集まりました。クロスロードの標準キットの中から、無作為に3つの間を選びました。

問 あなたは、市民

大きな地震のため、避難所(小学校体育館)に避難しなければならない。しかし、家族同然の飼犬「もも」(ゴールデンレトリバー、メス3歳)がいる。

一緒に避難所に連れて行く?

結果 Yes 3 × No 4

お寺が避難所になる場合でも、ペットを連れてくる人への対応は考えておく必要がある。受け入れてもみんなと一緒に寝泊まりというわけにはいかないだろうし。

避難所ではダメと言われるだろうけれど連れて行く。私にも大切なペットがいるので、考えただけでも涙が出てくる。私と同じくらいに思っている人もきっと多いはず。

でもゴールデン・レトリバーの3歳は野に放つにも避難所へ連れて行くにもデカイでえ(笑)。

以前、減災ゲームで同じ問題で考えたことがある。そのときはYesだったけど、今はNo。「ペットはアレルギーや感染症のもとになる」という意見もあるし。

鎖を放して野に放つ(笑)。うちの犬は、何とか生きていけるかも。



下寺町界限

上町台地は東側より西側の傾斜が急ですが、その西斜面と松屋町筋のあいだにお寺が建ち並ぶのが下寺町。高層化されていないお寺の崩壊には、緑豊かな斜面緑地を望むこともできますし、檀家以外にも門戸を広げはじめたお寺もあります。そんな界限も、松屋町筋を西へ渡れば黒門市場や日本橋の電気店街、外国人居住者が急増中の密集市街地とも接していますが、松屋町筋が区界でもあることから、通りを隔てた人の往来は少ないようです。

災害時にお寺に何が出来るかを自問

談 石川貴憲さん 應典院住職補佐

減災ゲームを應典院のスタッフ揃って行いました。私としては、自分の答えが一般大多数の人と同じであると考えていましたが、結果は全くの逆で、自分の意見が少数派であること、理由を説明しても意見の相違の溝はなかなか埋まらないことを実感し、もしこれが実際に災害の混乱のなかであれば、きっとパニックになっていたであろうと容易に想像できました。下寺町には文字通り24ものお寺が並んでおり、災害時には多くの方が避難してくる可能性も考えられます。その際にお寺が「個」として災害に立ち向かうのではなく、連携と役割分担をもって災害に立ち向かえたらどんなに多くの人の支えになれるであろうかと感じました。また、改めてお寺で働く者として、災害時に救いを求めてやってくる人とどう向き合うのか、ハード面とソフト面の両面から考え、日頃からの準備をしていきたいと思っています。

ロジモク減災勉強会 M1

地震の日本史 ~歴史から見える地震・地震から見える歴史
主催：からほり倶楽部 / 共催：ロジモク研究会、CEL/U-CoRo
2008年11月14日 / 会場：サロンdeありす(中央区谷町6)
講師：寒川 旭さん(産業技術総合研究所関西センター招聘研究員)

ロジモク減災勉強会 M2

秀吉の上町台地改造について ~大阪府庁地区の発掘調査から
主催：からほり倶楽部 / 共催：ロジモク研究会、CEL/U-CoRo
2008年12月12日 / 会場：サロンdeありす(中央区谷町6)
講師：鋤柄俊夫さん(同志社大学文化情報学部文化情報学科准教授)

上町台地100人のチカラ!

減災に挑むレスキューストックヤードの取り組み
主催：上町台地からまちを考える会
2008年11月18日 / 会場：地域交流スペース「結」3階(中央区上町1)
講師：栗田暢之さん(特活)レスキューストックヤード代表理事)

全国の被災地支援や防災・減災活動に取り組むレスキューストックヤードの活動と現状についてお話を伺いました。

まちあるきイベント

防災てらまちウォーク
主催：三帰会 / 2008年11月29日 / 会場：天王寺区下寺町界限
ゲスト：田中保三さん(まち・コミュニケーション顧問)、木下俊文さん(天王寺消防署地域担当司令)、服部隆志さん(アユス関西事務局長)、白鳥孝太さん(シャンティ国際ボランティア会)、上田假奈代さん(詩人)、弘本由香里さん(大阪ガスCEL客員研究員)、下寺町の僧侶たち

防災をテーマに、江戸時代から続く下寺町を歩きました。古の人々の智恵と実践のあとを訪ねるとともに、安全のための資源の特性と地域に開かれた活用のあり方などについて、考える機会となりました。

防災てらまちトーク

阪神淡路大震災14年 追悼のつどい
主催：三帰会 / 2009年1月15日 / 会場：大蓮寺本堂(天王寺区下寺町1)
ゲスト：渥美公秀さん(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授)

大震災から14年、「待つ・願う・祈る・寄り添う」「一人一人のいのち」に向き合う」をキーワードに、災害救援や復旧・復興支援が進むなか、一番大切な被災者が置き去りにされていないかを問い直しました。

※それぞれの談話は2008年8月時点のもの。肩書、所属等は当時(イベントは開催時)のものです。



コリアタウン界隈

大阪人の衣食を支え、今、韓流ブームでにぎわう鶴橋駅周辺やコリアタウン(御幸通商店街)界隈。JF鶴橋駅東側に広がる国際市場は、迷子になる観光客も現れるほどの迷路のような雰囲気人気です。また、大通りや商店街を歩入ると、長屋や文化住宅が所狭しと並んだ細街路が網の目状に走り、小学校や公園などが島のように立地しています。暮らしやすさはニューカマーの外国人にも人気で、さまざまな外国語があちこちから聞こえてきます。

ゲームからはじまりやがて真剣な議論にも

宋 悟さん (特活)コリアNGOセンター代表理事

和気あいあいとはじまった減災ゲームでしたが、終盤には「防災・減災」をテーマに、参加者が暮らし生野区の現状と関わりて結構真剣な議論になりました。こうした議論につながることで自分が「減災ゲーム」の持つ意味であると実感しました。地震発生に備えた学校における「形式」だけで役に立たない防災訓練の実態も話題になりました。地域は保護者が関心を持ちやすい視聴覚教材とこうしたゲームを組み合わせたツールを開発し、区PTA協議会を通じて各学校のPTAなどに働きかければ、「防災・減災」を考えるうえでの「入り口」の取り組みとして非常に有効ではないかとの提案もありました。地域の準備状況を想像すると「イザ!」というときに混乱の極みに達することは必至です。だからこそ、こうした取り組みは工夫次第では一気に広がる可能性を秘めていると感じました。

クロスロード in 上町台地界隈 減災ゲーム **ドキュメント** 2008年7月26日

コリアNGOセンター

多文化共生に取り組むコリアNGOセンターの会議室で、人権研修や民族学級、地域のまちづくりにも関わるスタッフなど5名が集まりました。クロスロードの標準キットの中から、無作為に3つの間を選びました。

クロスロード in 上町台地界隈 減災ゲーム **ドキュメント** 2008年7月22日

NEXT21

U-CoRoのある実験集合住宅NEXT21の住者8世帯から12名が集まりました。日頃のご近所付き合いでも見られない一面が垣間見えたようです。クロスロードの標準キットの中から、無作為に3つの間を選びました。



NEXT21 界隈

長堀通や上町筋から一本入れば静かなNEXT21界隈。事業所ビルや戸建て住宅、低層マンションなどが混在するまちは緑も多く、都心では良好な住環境に恵まれています。清水谷や空堀町という地名・町名があるように、上町台地を東麓に下る谷筋がいくつも走っており、南北に移動する際にはアップダウンを感じます。また、まちの各所でマンション建設が進む一方で、老朽化した建物やコイン・パーキングも少し目に付きます。

入居者同士、智恵と力を合わせる良い体験

田中雅人さん NEXT21入居者自治会会長

U-CoRoのあるNEXT21の入居者有志で、仕事帰りや家事のあとに三々五々集まって、減災ゲームを体験しました。「減災ゲーム」と言っても最初は「？」という反応でしたが、1問目から「う〜ん」と唸られる問題に、みんなも次第に没入していました。入居から1年ちょっとしか経っていませんが、普段から入居者同士でつながりを深める機会を工夫してきました。でも、問題への回答やその意見を聞いて「この人はこういう考え方をしはるんや」といった新たな発見がたくさんあり、互いにより知り合うことができました。小さな集合住宅なので、何か起これば入居者全員で智恵と力を合わせていかなければなりません。そのためにも減災ゲームは良いトレーニング機会と感じました。NEXT21ではこれを機に、災害発生時の対応策をみんなで考えていきたいと思っています。

問 あなたは、集落の自主防災組織リーダー

10分前の地震で津波警報発令。ラジオは40分前後で第一波が来襲する危険と報じている。みんなで声を掛け合い、10分あまりで高台への避難を完了した。が、一家族4人だけ姿が見えたらない。

探しに戻る?

結果 Yes 7 × No 3

A班 yes 4 : 3 no B班 yes 3 : 0 no

リーダーという立場だから動けない。それにリーダーだったら「おれの代わりに、キミ、行ってきてくれへん」って(笑)。

普通はYesかもしれないが、阪神・淡路大震災を経験した身から言えばNo。イザという時は、まず自分と家族の身の安全ってなってしまう。

これが都市部という設定ならNoだけれど、海辺の集落だからYesかな。みんな仲が良いはずだし、それならきっと探しに行くだろう。

リーダーが探しに行って死んでしまったら、残されたみんなが困るはず。リーダーなら家族よりも集落のみんなを助けるべきではないか。

リーダーならそういうときに探しに行かないと、あとで避難している人たちのモチベーションも下がるんじゃないかなあ。

問 あなたは、市民

今、大地震の被災地で、救援活動のためのボランティア保険の費用(約700円)を、被災地の自治体が払うのか、ボランティア本人が払うのかで悩んでいる。

自治体負担の意見に賛成する?

結果 Yes 3 × No 2

賛成 Yes 3 反対 No 2

ボランティアは保険料の支払い以外で貢献するのだから、「それくらいは役所が負担して」となるかもね。

すごく迷ってYes。ボランティアは危険な面もあるので保険には加入すべき。

たった700円と思うけれど、「役所が払え!」という人は多いんと違うかな。

実際にボランティアしている人はNoじゃないかな。「700円を出してくれないなら、やらない」なんて人はいるかねえ(笑)。

減災Cafe in 上町台地 「クロスロード」と減災×地域×コミュニケーションを開催

矢守克也さんから、減災ゲーム「クロスロード」の開発に込めたご自身の思いや各地での活用実践例などのお話を伺いました。上町台地でのゲーム体験者との意見交換もあり、議論が深まりました。

ゲスト: 矢守克也さん(京都大学防災研究所巨大災害研究センター准教授) 共催者コメント: 菅磨志保さん(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師) 開催日: 2008年12月8日 / 会場: NEXT21ホール 主催: 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL) 共催: 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター



開発者の矢守克也さんとともに、当日の参加者も減災ゲーム「クロスロード」の問題を体験。

※肩書、所属等はイベント開催当時のものです。 2008.12.8

あと一步に減災ゲームを使う

上町台地には直下型の大地震が来ると言われています。とんでもない規模の被害が出るという計算結果も公表されました。ただ、多くの住民は、防災・減災が必要だとは思いつつ、何をしたらよいのかと戸惑うばかりかもしれません。ところが、上町台地は幸いです。街の生活を愛している人が多いように思えます。街の歴史や文化に関心をもつ人が多くいらっしゃいます。そして、街をおもしろがっている元気な人もたくさんいらっしゃいます。地域への愛着、地域資源、そして、リーダーが確保されているのですから、街ぐるみの防災・減災へはもうあと一步です。この一步はあまり深刻に考えると出てこないかもしれません。むしろ、楽しんで参加できる場がまず必要だと思います。減災ゲームはそんな場を作り、盛り上げてくれるツールとして開発されました。ぜひ、ご近所でやってみてください。ゲームに参加して楽しかった人達は、きっと、職場で、飲み屋で、街角で、知り合いに話して下さると思います。そうすれば、ゲームの中身、つまり防災・減災が少しずつ広がると思います。防災・減災も上町台地らしく展開できればと願っています。

渥美公秀 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授(現在は大阪大学大学院人間科学研究科教授)、上町台地からまちを考える会理事

Style 4 日常から減災へ 思いをつなぐ



4 土の人と風の人とともに歩む減災への道

2007年の秋・冬のU-CoRoウィンドウ・エキジビション03で、はじめて上町台地に届けられたストーリーブック『いのちをまもる智慧 減災に挑む30の風景』。その発行者(特活)レスキューストックヤードの主催で、2009年2月、1カ月間にわたって『いのちをまもる智慧』の巡回パネル展示とリレー・トークを繰り広げる「減災キャラバン on 上町台地」が行われました。上町台地境界の寺社や地域の文化複合施設など4つの魅力あふれる会場をめぐるながら、地域の文化やまちづくりのなかから減災を考えていく協働プロジェクトでした。

減災キャラバン on 上町台地

～災害からいのちと暮らしをまもるために

上町台地は戦前の室戸台風以降は幸いにも大きな災害に見舞われることなく過ぎてきました。しかし、最近話題の上町断層帯が直近にあることや、都心居住の地として人口が回復しつつあることなどもあって、防災・減災への関心が芽生えてきています。

そうした地元地域に先達の声を伝え、防災・減災について考える機会をつくるキッカケとして、(特活)レスキューストックヤード(RSY)と大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)は、上町台地上での「いのちをまもる智慧」のパネル展示を、からほり倶楽部や應典院、高津宮など地元組織とともに行いました。

このパネル展示は、上町台地で巡回展示され、併せて、『リレー・トーク』と題した小さな集まりも開催。展示場所ゆかりのテーマや人が登場し、参加者とともに「今」と「これから」を語り合う機会となりました。

● 展示開催期間・場所

2009年
 應典院 = 2月1日(日)～7日(土)
 萌 = 2月8日(日)～14日(土)
 高津宮 = 2月15日(日)～21日(土)
 練 = 2月22日(日)～28日(土)

主催：(特活)レスキューストックヤード
 共催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、
 應典院、高津宮、からほり倶楽部 他
 協力：練、萌、直木三十五記念館、
 CEL/U-CoRoプロジェクト・ワーキング 他



comment

減災の風を上町台地に、そして上町台地から

日本が災害大国であることは皆、知っている。しかし、自分が災害に遭遇したかといえ、その圧倒的多数に経験はない。ただし、こうとも言える。今身近に災害がないということは、日一日と災害発生のカウントダウンが始まっているのだと。上町台地も例外ではない。現実突きつけられた被害予測は、さすがの大阪人も「知りまへん」では済まされない。だから、本キャラバンで「減災」の風を吹かせたかったのである。

この間のお付き合いで、この地に根を張る人々の暮らし振りや住まい方に興味を引かれ、また斬新さとの共存を含めたつながりの奥深さやおせっかいが成立するといった「地域コミュニティ力」には驚嘆した。こんなにおもしろい街の存在に感謝さえしている。しかし、本当にわかったことは、たった1ヶ月では何もわからないということである。まちづくりのキーワード「若者・ばか者・よそ者」のよそ者として、こうなったら意地でも「減災」のエキスを注入し続けようと思っている。過去の『智慧』を参考に、これからも『知恵』を絞りたい。

栗田 暢之
 (特活)レスキューストックヤード代表理事



リレー・トーク第1回目
僧侶の覚悟
 いつか出会う被災死への向き合い方
 開催日：2009年2月6日
 ゲスト：秋田光彦さん(大蓮寺、應典院住職)
 五百井正浩さん(玉籠寺住職)



<語られた言葉から>
 被災地では所属は通用しない
 なぜあの日、(死者が)
 私でなかったのかという
 自問がずっと続いている
 寺は日常を非日常につなげる
 - アートと一緒
 (秋田光彦さん)

<語られた言葉から>
 悲しませてあげる
 ことも支援
 亡くなられた方への
 尊敬と、遺族への配慮
 被災者が感謝の念を
 持って生きるには
 (五百井正浩さん)

第1会場
 2月1～7日
 應典院



大震災に遭遇した僧侶として、今も震災に向き合い続けることの意味をともに考え、日常と非日常をつなぐ場所として寺院が果たしうる役割などについて語られました。

應典院本堂ホール

減災は、人と人、人と街とのつながりを深めること

後日談

秋田光彦さん 大蓮寺・應典院住職

「減災」という見方・考え方を知って、災害に対する意識がずいぶん変わったような気がします。万が一の緊急対策というより普段の暮らしについて、丁寧に目を配るようになりました。だから日常の光景のなかにある、お寺という可能性についても自覚ができました。地域における大事な資源であることの発見です。

「僧侶の覚悟」というタイトルは重かったけれど、やはりお坊さんも普段着の姿に気づこうということでしょうか。パネル展でも感じましたが、減災とは人と人、人と街のつながりを深める以外にありません。改めて僧侶として、いのちに寄り添うことの意味を考えさせられました。

私の寺のある下寺町では、減災キャラバンに先立って「防災てらまちウォーク&トーク」を開催、また今年9月に若手僧侶を対象に減災の研修会が開かれます。伝統の街・寺町にもゆっくりと「いのちを守る智慧」が根付きはじめています。



必要なのは「話し合う」覚悟、お互い好き同士になりましょう

後日談

呉光現さん 聖公会生野センター総主事

対話の基本は「相手に対する関心」だ。日本語同士でも無関心なら対話は成立しないことを知っている僕たちは、外国人に対してどんな関心を持っているのだろうか？ いざ災害の時、言語・歴史・文化の違うもの同士が対話するためには日常の「相互関心」が大切。

特に、多数者日本人は、普段から民族、人種の少数者の声を聞くこと、聞いていることが、「異文化社会での減災」に不可欠である。

関心不足の状態では災害が起こってもそこから始まるしかない。阪神・淡路大震災で情報弱者に置かれたベトナム人のコミュニティを思い起こそう。彼ら/彼女らは、1カ所に集まるしかなかった。それがまた地域のなかでは「異様に見えた」という。この偏見と「知らないものたちが集まることに対する恐怖心」を取り除くには、やっぱり「話し合う」覚悟が必要だ。

相手に関心を持てるなら言語は2番目、3番目だ。これは恋愛と似ているかも？ ある人を好きになることがその人への関心になるのだから…。お互い好き同士になりましょう。



リレー・トーク第2回目
対話の覚悟
 “その日”をともにする他者への向き合い方

第2会場
 2月8～14日
 萌

開催日：2009年2月13日
 ゲスト：呉光現さん(聖公会生野センター総主事)
 渥美公秀さん(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授)

<語られた言葉から>
 対話とは相手のことに関心をもつこと
 共存はしていても、共生はしているか
 多文化でなく「他文化」に目を (呉光現さん)

<語られた言葉から>
 本気で対話しようとするなら皮膚感覚
 まちの一体感つくるには、気づいた人が与え続ける
 それでもがんばってる人を応援する、一緒に行動する
 (渥美公秀さん)

異文化間での“その日”に向けた、「対話の積み重ね」や「共存から共生へ向かう関係性づくり」など、取り組むべき課題が浮かび上がってきました。



直木三十五記念館(第2階)

※それぞれの談話、コメントは2009年8月時点のもの。肩書、所属等は当時のものです。

comment

「その日」を意識し、ともに次の一歩を

2007年の秋にU-CoRoで蒔かれた「減災」のタネが上町台地のあちこちで芽吹きました。その芽をつなぎ、新たな芽吹きを促してくれたのが、「よそ者」の栗田さんたちが持ち込んでくれた「減災キャラバン on 上町台地」です。パネルで紹介された個々の地域・組織が文字通り協働し合うことで、取り組みや現状と課題などを互いに共有し合うことができただけでなく、一人ひとりの想いや悩みなども垣間見合うことができました。

人は危機に直面したときほどその内面が浮かび上がると言います。自然災害に遭ったときには知らなかった内面が連携や協働を左右するかもしれません。普段は表れにくい内面が今回のプロジェクトを通じて相互に感じられたと思います。

すでに上町台地では、地域防災リーダーなど住民の方々による防災・減災に向けた取り組みも積み重ねられています。次のステップではそうした動きとも距離を縮めながら、「その日」を互いに意識し合い、ともに考え合える関係をより広げていきたいと思っています。

早川厚志
まちづくり工房「減災キャラバン on 上町台地」上町サイド幹事

減災キャラバン on 上町台地～「その日」が垣間見えましたか？



開催日：2009年3月13日
サロンdeありす(練2階)
巡回パネル展の開催先の方々やリレー・トーク登壇者が一堂に会し、1か月にわたった今回の活動を振り返りながら、地域の特性を踏まえつつ進められるべき、減災活動のこれからについて語り合いました。

いつか来る「その日」に向けた「次」について

後日談

小谷真功さん 高津宮宮司

高津宮でのリレー・トークでは、地域住民との絆を強くすることが災害を乗り越える原動力となることを教えていただき、高津宮の今の運営と符合する点があることに意を強くすることができました。

また、以前より関わってきた高津地区まちづくりの会など地域活性化活動への参加、協力する意義を明確に見出すことができました。都心に位置する高津地区や上町台地にあるマンション等の集合住宅は個々にとっては便利で快適である反面、地域社会との結びつきが希薄になる傾向があります。それ故、神社での祭りや催して人々が交流できる機会をつくることで、社会に貢献できる重要な役割の一つだと思われます。そして、地元地域を活性化する各種団体と連携を図ることで、より幅のある減災活動になると思いました。

高津宮には昔より自然万物に神を見出してきた証でもある鎮守の森があり、緑少ない都心にあって癒しの場にもなっています。その森を守り続けることも、いつか来る「その日」に備えることではないかと信じています。



高津宮

リレー・トーク第3回目 避難所の覚悟 避難してくる被災者への向き合い方

第3会場 2月15～21日 高津宮

開催日：2009年2月20日
ゲスト：小谷真功さん(高津宮宮司)
田中保三さん(まち・コミュニケーション顧問)

<語られた言葉から>
神社は本来清い心を養えるところ
モノはなくなっても、ヒトがいて復興した
官と民の間の「公」が重要 (田中保三さん)

<語られた言葉から>
神社は社会の共有財産
民のかまどはにぎわいにけり
都会のなかで交流できる場に (小谷真功さん)



震災時の教訓をうかがい、上町断層が動くときに大勢の避難所となるであろう高津宮としての覚悟や具体的な対応について意見が交換されました。

高津宮(高津の富亭)

まち歩きトーク 2009年2月15日

減災ストーリーブック「いのちをまもる智恵」の制作に携わった、花村周寛さん、吉椿雅道さんとまち歩き

ノスタルジーだけでは町は守れない
現状へのシビアな眼差しと、
旧来の情緒やつなかりを
両方満たす方が、
クリエイティブだと思う
(花村周寛さん)



人が「文化」を守るだけではなく、「文化」が復興の力になっていく
日常をしっかり生きることが大切 (吉椿雅道さん)

展示風景、リレートーク、まち歩き撮影・コメント編集：関口威人さん

そして1年後、2010年1月26日

減災Cafe in 上町台地

event & workshop

減災キャラバンの一歩から考える、生活文化としての減災



左から、栗田暢之さん、瀧美公秀さん、矢守克也さん

阪神・淡路大震災から15年の歳月が流れていくなかで見えてきた、生活文化としての減災の必要性。こうした思いと実践を育みながら全国の被災地をめぐる専門家のみならず、上町台地の面々の出会いから生まれた取り組みの一つが「減災キャラバン on 上町台地」。この上町台地に刻まれた小さな一歩をふり返り、生活文化としての減災へ、智恵を交わし語り合う、減災Cafeを開催しました。

生活文化としての減災が、今なぜ必要とされているのか。「災害文化と生活防災」・「減災コミュニケーションと災害ボランティア文化」をキーワードに3人のゲストとともに考えました。



ゲスト：矢守克也さん(京都大学防災研究所教授)
瀧美公秀さん(大阪大学大学院人間科学研究科准教授)
栗田暢之さん(特活)レスキューストックヤード代表理事)
「減災キャラバン on 上町台地」に参加したの方々

開催日：2010年1月26日
会場：大阪ガス実験集合住宅NEXT21ホール
主催：大阪ガス(株)エネルギー文化研究所(CEL)
共催：(特活)レスキューストックヤード、
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

2010.1.26

※談話、コメントは2009年8月時点のもの。肩書、所属等は当時(イベントは開催時)のもので。

「その日」に向けて、試される人のつながりと地域力

後日談

白石喜啓さん(有)ライフ・ステージ代表取締役

自然災害を未然に防ぐことはむずかしいですが、災害が起こったあとに被害拡大を防ぐことは可能なことだと思います。しかし、そのときこそ地域のつながりや力が試されるのではないのでしょうか。例えば、上町断層が動けば広範囲に被害が起きるため、空堀界隈に支援の手が伸びてくるまで時間がかかることでしょう。まずは近所の人間が助け合って、できることをするのが第一になります。

私が暮らしてきた空堀界隈では、街並みとともに今も地域のつながりが残っています。しかし、気がつけば近所総出の大掃除など、日頃からのつながりの機会が減っていました。減災キャラバンのリレー・トークではそんな地元の現実に気づかされました。

あのあと、いつの間にか姿を消していた防火用水を近所で再発見しました。用水があれば、住民同士力を合わせて初期消火することも可能になります。「その日」をちょっと意識しながら、日常のなかでご近所付き合いを重ねていくことも減災への道だと再確認しました。



リレー・トーク第4回目 路地の覚悟 長屋のまちでの「その日」への備え方

第4会場 2月22～28日 練

開催日：2009年2月27日
ゲスト：六波羅雅一さん(からほり倶楽部代表理事)
白石喜啓さん(有)ライフ・ステージ代表取締役、地域住民)
菅磨志保さん(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師)

<語られた言葉から>
防災は事前に組み込んでおくべきプロセス
(菅磨志保さん)



<語られた言葉から>
このまちのよさ
見つめなおせた
(白石喜啓さん)

<語られた言葉から>
まちへの興味で
減災も変わる
(六波羅雅一さん)



長屋のまちで起こりうる被害について考え、現実をしっかりと受け止めたうえで、減災の智恵を積み重ね、いかにその実を上げていくかについて語り合いました。

サロンdeありす(練2階)

Style 4 日常から減災へ 思いをつなぐ

ふだんの “避難所” 体験のすすめ

災害のときに、私たちのいのちと暮らしを支える拠点になるのが“避難所”です。もしものときの避難所が、いつもの身近な存在になれば、もっと安心について考えることができるのではないのでしょうか。

大阪市内・上町台地界隈の数箇所で、地域のみなさんが行政や学校と協働して、こうした避難所の開設訓練や見学会に取り組み始めています。

そこには、地域の特性に応じた多彩な工夫が見られます。“避難所”体験から生まれる“減災まちづくり”。それらのさまざまな取り組みからは、多くの学べることが見えてきます。



新潟県中越地震(2004年)で避難所になった体育館 (写真提供: (特活)レスキューストックヤード)

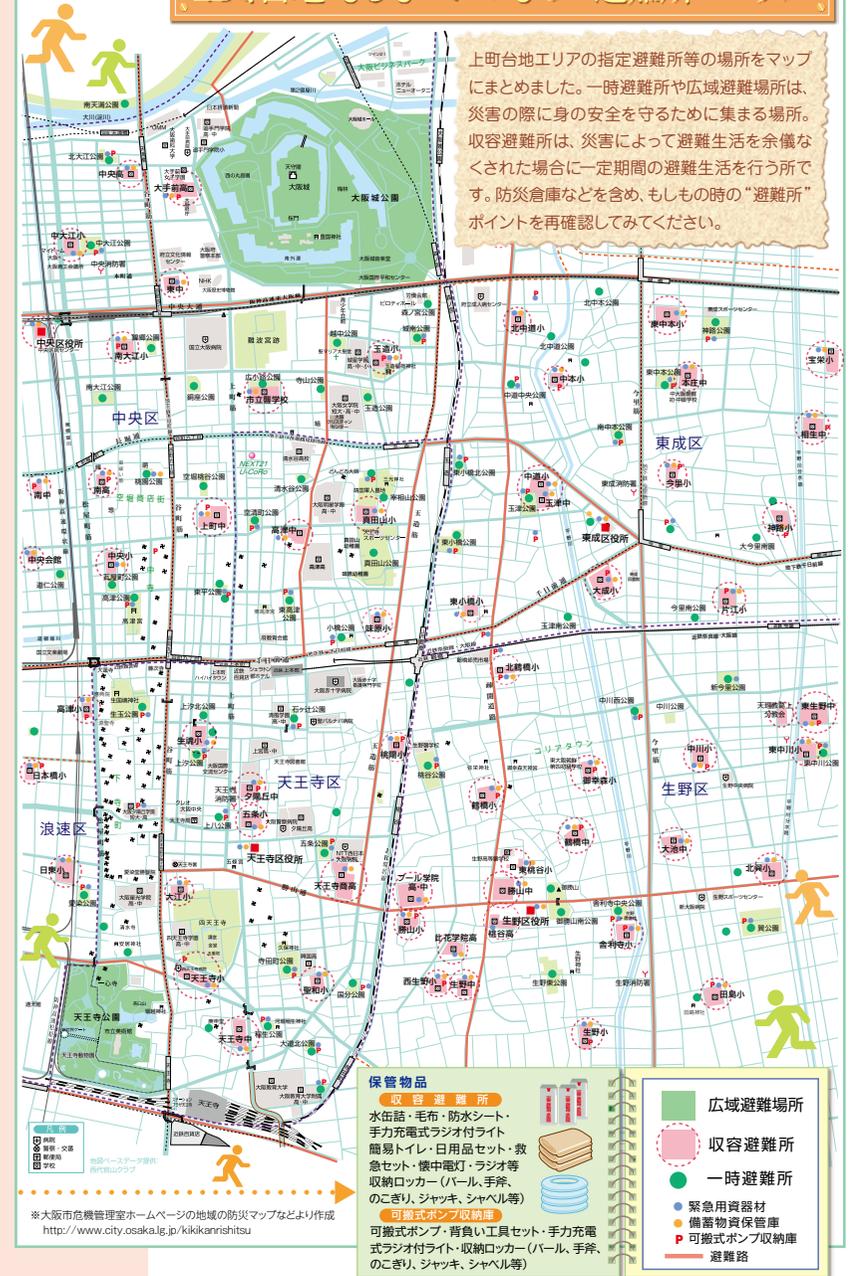
避難所の覚悟

「指定避難所」の困難さは、上の一枚の写真がすべてを物語っている。人口5万人弱とある街でもこの現状だ。大都市・大阪では想像を絶することになる。それだけではない。多くの学校のトイレは和式が主流だ。そこで障害者は生き地獄にあった。乳飲み子を抱える母親も辛かった。容赦なく泣き続ける我が子を抱いて、極寒の屋外であやし続けた。やっとの思いでたどり着いたある老夫婦は、すでに満杯状態の中でパイプ椅子一つに交代で座り、40時間ぶりに届けられた水をやはり交代ではじめて口に。どうしようもないから、余震でいつ崩れるか分からない自宅に留まった者もいた。そして「指定避難所」しか配布されない食糧をもらいに行ったら、「ここにいる者の分だけだ」とあしらわれた。この国の「指定避難所」はシェルターなのか。これではせつないのちが救われた者の安堵の空間はおろか、泣くこともできない。しかし、過去の災害を丁寧に訪ねると「避難所」は学校だけではなく。地域の建設会社が広い敷地と事務所スペース、お寺が本堂を、ホテルが宴会場を、レストランが食堂を…、それぞれ地域のために開放した。自分の身近にどんな「避難所」があるのか確かめてみよう。そしてもしもの時には、「どうぞお使いください」と言い合える関係を築いておこう。

栗田暢之
(特活)レスキューストックヤード代表理事

comment

上町台地 もしも・いつもの“避難所”マップ



上町台地エリアの指定避難所等の場所をマップにまとめました。一時避難所や広域避難場所は、災害の際に身の安全を守るために集まる場所。収容避難所は、災害によって避難生活を余儀なくされた場合に一定期間の避難生活を行う所です。防災倉庫などを含め、もしもの時の“避難所”ポイントを再確認してみてください。

上町台地 “避難所” 取材ノート 東中川小学校

避難前の安否確認も織り込んだ 避難所の開設訓練！

上町台地 “避難所” 取材ノート

避難所開設訓練から多くの気づきを得た 住商工一体のまち

2010年7月16日訪問
避難所開設訓練についてお聞きしました。

まず、避難所内のスペースを町会単位で設定したんです。

小西隆夫さん 東中川連合防災リーダー代表

まちの特徴

住商工混在のにぎやかな下町・生野区。今も地域のつながりが強い地区が多く見られます。近鉄今里駅から南東に徒歩10分のところにある東中川小学校の校区も、小さな町工場や事務所ビル、飲食店などが散在する密集市街地ですが、住民同士のつながりがしっかりした地域です。

川沿いに建つ東中川小学校は地域の収容避難所

東中川小学校校区 エリア人口など

常住人口 13,836人
昼間人口 12,964人
高齢化率 21.1%

避難所開設訓練ポイント
までに10回にわたる会議やワークショップを開いたほか、小さな準備会も積み重ねることで、住民意識を高めている。

東中川小学校
東中川小学校
東中川小学校

★避難誘導 2009年3月1日訓練

訓練当日に連合町会エリア、人口の1割近い、1,175人の参加者を得た背景には、事前準備だけでなく、日頃からの地域・近所付き合いもある。

事前に、収容避難場所を町会ごとに設定

★避難所開設訓練から

2009年春、大阪市内での初めての大規模な避難所開設訓練が行われました。準備に半年以上掛けた訓練には、地元連合町会内人口の1割近い、1,175人の参加者がありました。班・町会単位での避難前の安否確認にはじまり、教室など校内の町会単位での割り振りなど、住民が慌てて避難することなく、落ち着いて初期消火や救助活動を行えるようにとの配慮もされるなど、準備期間を通じての“気づき”もたくさんあったようです。

★避難状況確認

私自身も被災した阪神・淡路大震災での経験と伝えていきたいです。

地域の活動でも使われる校内の生涯学習ルーム

小学校の運動場

まちは商店や工場も多いが、災害時に活かせる資機材を持っているところも多いと目をつけて、協力依頼をしている。

★避難所の開設・運営

資機材を提供してもらえない事業所とは、防災マップへの掲載や従業員への避難所への受け入れなど、キブ&テイクの関係をつくっている。

大い敷地や建物を持つ宗教施設にも連合町会が協力と呼びかけて、大阪市の42箇所の避難所として、いゆる災害弱者の方たちの42箇先理想している。

試行錯誤して防災マップを作ったことが、生野区内の他地域で防災マップづくりを促しているキッカケにもなっている。

42箇避難所である小学校の隣が公園で、防火水槽や可搬式ポンプなど救護・救助機材も設置されているのも、このメリットの一つ。

市立東中川小学校 “収容避難所” データ

水缶詰(500ml)	1800本
毛布	300枚
簡易トイレ	4基
ブランケット	50枚
日用品セット	120セット
防水シート	120枚
懐中電灯	20台
ラジオ	10台
トイレ消耗品	6箱
救助用資機材	1セット

収容可能人数 860人

★避難所の開設・運営

避難所開設訓練写真提供: 生野区役所

備蓄物チェック 体育館

天理教葛上教会は要援護者の避難先

東生野中学校も地区内の収容避難所

隣の東中川公園は一時避難場所

上町台地「避難所」取材ノート

地域の人たちが避難所見学のワークショップを開催！

上町台地「避難所」取材ノート
大手前高校

避難所見学会でちょっと縁遠い高校(避難所)とのつながりもつくる都心のまち

2010年7月30日訪問
北大江地区まちづくり実行委員会、北大江連合振興町会、中央区役所によるワークショップに参加しました。
吉見孝信さん



まず実際に目で見て自分たちで考えるのがすべての始まり。

まちの特徴
都心のターミナル・天満橋駅があり、オフィス・ビルや商業施設が数多く立地する北大江地域。谷町筋から東側には大阪府庁を中心とした官庁街も広がっています。近年は事業所跡がマンションに変わりつつありますが、平日昼間は来街者の多いまちです。

ポイント 小中学校には身近な住民も多いが、ちょっと縁遠い高校を避難所見学会の対象とすることで顔つきにもなっている。

ポイント 地域内に収容避難所は3カ所あるが、たれがどこへ避難しているのかわかりづらくなる可能性も。

北大江連合振興町会 エリア人口など
常住人口 3,076人
昼間人口 35,528人
高齢化率 16.6%
(平成17年国勢調査より)



ポイント まわりには会社も多く、天満橋駅もあるため、平日の昼間に災害が起きると、より大勢の人を受け入れなければならないことになるかも。

ポイント 授業中に災害が起きた場合、遠いところから通う生徒も帰宅困難になって、避難者とともに校舎に留まる可能性もある。

2010年7月30日 見学



最初、震災時の避難所の様子や同地域での課題についての説明から

府立大手前高校
大阪府中央区大東第2-1-11
在校生は約997名

エレベーターで最上階へ
ポイント 校舎は新しいが、都心の学校は高層化しているから、エレベーターが使えないと上層階は行き来しづらい。



ポイント クーラーのある教室も多そうだが、全部使用すると電気分容量をオーバーすることもあるらしいので、注意が必要。

水缶詰(500ml)	備蓄品データ
1800本	毛布 300枚
	簡易トイレ 4基
	プランケット 50枚
	日用品セット 120セット
	防水シート 120枚
	懐中電灯 20台
	ラジオ 10台
	トイレ消耗品 8箱
	救助用資機材 1セット

保健室 保健室など生徒の大事な資料などがあふ部屋は、使われないように決めておくが、先生の資料などを移動してもらってから使うよう留意が必要。

運動場の防災倉庫 庫は、まわりに大きな運動器具を置かれたりすると、開け入れがむずかしくなりやすい。

教室 校舎内に順に教室めぐり

音楽教室

視聴覚教室

体育館横には防災倉庫とポンプ収納庫

備蓄物資

武道場は畳敷きで座り心地も良い

プール プールの水を消防に利用

上町台地「避難所」取材ノート

上町台地「避難所」取材ノート
五条小学校

地元での避難所開設訓練 実施に向けて準備中！

小学校(避難所)と地域のふだん付き合いから避難所開設訓練をめざすまち

2010年7月7日訪問

避難所開設訓練についてもお聞きしました。

富士原純一さん
五条連合防災リーダー隊長



地域の人たちみんなで防災・避難を考えることが大切。

まちの特徴

五条小学校周辺は上町台地でも良好な住宅地として知られています。JR桃谷駅から西へ、天王寺区役所周辺に広がるまちには、大通り沿いにオフィスビルや商業施設も立地していますが、戸建て住宅や中低層マンションが主体のまちです。近年は超高層マンションも建ちはじめ、人口も増えるなか、地元町会やPTAなどでは新旧住民の出会いと交流に努めています。

ポイント まわりには医療機関も多いが、災害時にはどこも一杯になるだろうから、あることで安心してはいけません。
ポイント 避難所と言っても小学校として建てられているので、避難所として使いやすくはなってはいません。



校庭の向こうには高層マンション



五条小学校校区 エリア人口など
常住人口 14,186人
昼間人口 29,605人
高齢化率 17.6%
(平成17年国勢調査より)

避難所開設訓練に向けて

収容避難所指定を受けた小学校を、地蔵盆や地区フェスティバルなどの出会いと交流の機会の会場にしてきたことで、イザというときの避難所が身近に感じられるようになってきています。2010年秋に開催される避難所開設訓練に向け、夏前から地域の人たちによる準備が進められています。



秋の訓練に向け、地域住民による災害図上訓練を区役所で実施(2010年6月)



市立五条小学校
大阪府天王寺区小宮町9-28
在籍児童数約740名

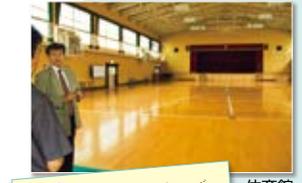
2010年7月7日 見学



校舎入り口

五条小学校の石丸順一教頭先生(右端)に校内をご案内いただきました。

ポイント 災害時の避難所運営では、まず受付が重視されている。避難者の受付や救済物資の受け入れなど、実際にも大変だろう。



体育館

市立五条小学校「収容避難所」データ

水缶詰(500ml)	備蓄品データ
1088人 1800本	毛布 300枚
	簡易トイレ 4基
	プランケット 50枚
	日用品セット 120セット
	防水シート 120枚
	懐中電灯 20台
	ラジオ 10台
	トイレ消耗品 8箱
	救助用資機材 1セット



五条小学校が地蔵盆の会場

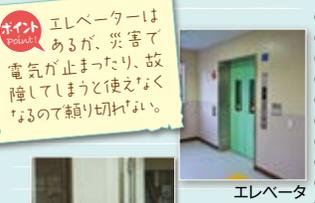


五条小学校隣には天王寺消防署



西門前にある将軍地蔵尊

ポイント 体育館は広いが、ふだんでも夏は暑くて冬は寒いため、ここで長時間過ごすのは健康な人でも大変そう。



エレベーター



備蓄物資



敷物と空調がある多目的室

ポイント ふだんの地域行事で学校をよく使っているため、PTA以外の地域住民でも校内の様子を大体知っている住民は多そう。

ポイント プールは校舎屋上にあるので、水は使えても、階下まで運び出すのが大変かもしれない。



AED

ポイント 備蓄物資の置き場は建設時から注意されているので、ここでは放送室の一角をつぶして確保している。



上町台地「避難所」取材ノート



防災・減災イベントで避難所体験のワークショップ!

上町台地「避難所」取材ノート 源聖寺

防災イベントへの参画から芽生えた避難所・防災への関心

2010年7月14日訪問



2008年秋開催の「防災まちウォーク」で、「体験」避難所はどうするの?」の仮想避難所となった源聖寺

橋本幸典さん 源聖寺住職

防災・減災に対する自分自身の意識も確実に変わりました。

まちの特徴

松屋町筋と上町台地西麓の緑に挟まれて、南北に続く寺院群。下寺町はその東手の緑地帯を借景に、江戸期から続く寺町の風情を21世紀の現代にも伝えている地域です。南端の一心寺と下寺町を舞台に開かれる「なにわ人形芝居フェスティバル」も、春の風物詩です。



防災まちウォークの一場場となったこととして、防災・減災と向き合うキッカケを得ている。

準備のプロセスを通じて、避難所など地域での防災の現状、被災地での避難所問題などをさまざまな知識や経験と習得している。

避難所開設訓練に向けて

08年11月に下寺町の若手僧侶の会「三婦会」が中心となって、「防災まちウォーク」が開催されました。下寺町の南から北へ歩きながら、あちこちのお寺やハイツ・リレーや炊き出し体験、お寺を学校に見立てた避難所体験ワークショップなどたくさんさんの試みを参加者は実体験できました。普段は入りにくいお寺に伺って、境内の様子を見知ったり、お坊さんと出会ったことも防災・減災への一歩になっています。

参加者に考えてもらう仕掛けを繰り返すプロセスが、自らも考えるキッカケになっている。



トイレの使用と掃除は大きな問題

消灯時間も話し合っ決めて



足りない救援物資、どう分ける?

2008年11月29日ワークショップ

ここからは全員が仮定の避難者



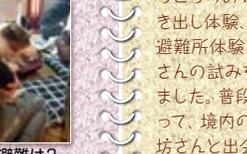
避難場所の割り振り



避難者の受付と名簿作成



ご遺体の安置も想定



ペットの避難は?

防災まちウォークの写真提供：山口洋典さん

避難所体験ワークショップの事前相談を進めるなかで、区役所の防災担当校長経験者など出会い、つながりが出来ている。

防災ワークショップ経験者のアドバイスとヒントに、自分たちでも寺院ならではのメニューを考えていた。

参加者一人ひとりに考えてもらう仕掛けとして、不自由や不公平な状況と避難所体験ワークショップでわきまをわけていた。

その後

それぞれの地域で新しい活動が展開。

U-CoRoでの展示以後も、地域のみなさんが行政や学校、企業と協働して、避難所の開設・運営訓練やフォーラムの開催などに取り組んでいます。

桃園連合振興町会の防災訓練



もしもの災害に備えた自主防災訓練を桃園公園で実施。(2010年11月14日)

五条小学校での収容避難所開設・運営訓練



各町会からの避難誘導訓練から、受付、救護、被害状況集約、炊き出しまで。(2010年11月21日)

ロジモク減災研究会

ロジモク研究会 / からほり倶楽部主催、CEL / U-CoRo が共催する同研究会も、路地と長屋のまちで、2011年1~2月に3回にわたって開催。

防災力向上フォーラム「住む人・働く人の備え」



北大江での地域防災と帰宅困難者への対応などをテーマに開催。(2010年12月6日)



路地と長屋の地域で本格的に取り組みを開始!

上町台地「避難所」取材ノート



上町台地「避難所」取材ノート 南高校

これからもみんなで生き抜く道を探る路地と長屋と商店街のまち

まちの特徴

路地と長屋のまちとして脚光を浴びる空堀界隈。雑貨店やカフェなどに上手に再生された長屋が、まちのあちこちに増えています。そこはいわゆる木造密集地域でもあります。地震や火災などの災害に、まちぐるみで立ち向かうべく、小さな防災広場の整備や連合町会単位での防災訓練の開催など、取り組みも進みはじめています。

防災・減災への取り組みは、また始まったばかり。

浦野院次さん 桃園連合振興町会会長



ふだんの安全面も考えて、学校の鍵は連合振興町会の災害救助部長だけが持っているそう。



学校横の路地

南高校は選挙時の投票所にするので、地域住民でも1階部分は少し知っている人もいます。

2010年8月9日訪問 今後の地域活動についてもお聞きしました。



近隣の商店街



桃園連合振興町会 エリア人口など

常住人口 4,314人
昼間人口 5,198人
高齢化率 22.7%
(平成17年国勢調査より)



地域の収容避難所、南高校



市立南高等学校 収容避難所「データ」	
収容可能人数	841人
備蓄品アーク	
水缶(500ml)	1800本
毛布	300枚
簡易トイレ	4基
プランケット	50枚
日用品セット	120セット
防炎シート	120枚
懐中電灯	20台
ラジオ	10台
トイレ消耗品	8箱
救助用資機材	1セット



災害に立ち向かう 知恵をみんなで重ね合うことが大切。

六波羅雅一さん からほり倶楽部

2010年8月9日 見学



クーラーのある教室は多く、電気容量も大丈夫だそうだが、災害直後に使えるかどうか。



体育館は3階でエレベーターもないため、高齢者など上がり下りが大変な避難者も多く出そう。

1階の格技室は板の間だが畳も敷けるので、畳部屋が良い避難者や上り下りがしんどい避難者を受け入れられる。



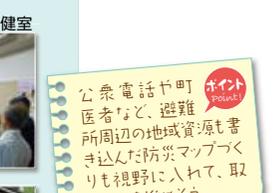
校外への通路の1つ



地階には受水槽



ロビーに公衆電話



保健室

周囲は囲まれているが、行き止まり路地が商店街とのあいだには、非常扉が設置されている。



公衆電話は1階ロビーに1台あるが、NTTは撤去したがついていられなく、この先も設置できるかどうか不明。



公衆電話や町医者など、避難所周辺の地域資源も書き込んだ防災マップづくりも視野に入れて、取り組みを進めよう。



*取材内容等は2010年8月時点のもの(その後は随時)。肩書、所属等は当時のものです。

上町台地 “避難所” 取材ノート
高津宮

災害時、多くの被災者に
どう手を差し伸べるかを考える

上町台地 “避難所” 取材ノート



未来の被災者と向き合う、
一時避難所指定の公園に
囲まれた神社

2010年7月29日訪問



地域のつながりの中、
災害が起こる日のことを
考えてみたい。

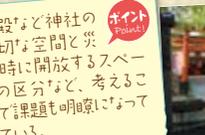
小谷真知さん
高津宮宮司



長い階段の
先にある本殿

本殿など神社の
大畑など空間と災
害時に開放するスぺ
ースの区分など、考える
ことで課題も明らかになって
きている。

神事用籠は災害時に活用も



神事用の水には
配慮を

まちの特徴

上町台地の西崖上に鎮座する高津宮。マンションや事業所などが立地する都心にあつて、丘上の境内は緑多いオアシスになっています。受け継がれてきた神事・祭事のほか、氏子や市民が主催する楽しいイベントも年間を通じて多数開かれてもいます。



2010年7月29日 見学



絵馬堂
災害時の活用を考えたい、
絵馬堂や高津の富亭、参集殿

神事や祭事で神社を
訪れる氏子とのつな
がりや、町会や婦人会など
地域とのつながりにそのまま
重なっている。

つながりから生まれる次の一歩

境内は高津公園に囲まれています。同公園は一時避難所に指定されており、災害時には多くの被災者が集まることが予想されます。大勢の被災者を前にしたとき、「お宮で手を差し伸べることが何かないか」と宮司さんも防災・減災への想いを強めています。09年初春には「減災キャラバン on 上町台地」にも参画されるなど、つながりづくりや智恵の吸収・共有にも努めています。



高津の富亭



北側の石段



隣接する高津公園は地域の
一時避難所



参集殿



公園の地下には防火水槽



公園にある
防災倉庫と
ポンプ収納庫

神事や祭事以外の
多様なイベントにも
境内を開放することで生まれ
るつながりが、災害時にも役
立ち可能性を見据えている。

参集殿や催事
用のテントなどは
災害を免れたら
開放されるつもり。神
事用の籠も提供する
覚悟を決めている。

子ども向けの夏
休み宿泊体験
では消防署員に話をし
てもらうプログラムも組む
など、ふたから仕掛け
づくりを積み重ねている。

減災トークセッション
あなたのそばの “避難所”



U-CoRo 展示で紹介した、4つの地域の取り組みに学ぶトーク・セッション。災害時、私たちが身を寄せ、安全を確保する場所である“避難所”についてよりリアルに感じ、地域の暮らしやまちづくりについて改めて考える機会となりました。



右から、栗田暢之さん、富士原純一さん、浦野院次さん、
吉見孝信さん、小西睦夫さん

語り手：富士原純一さん(五条連合防災リーダー隊長)
吉見孝信さん(北大江地区まちづくり実行委員会事務局長)
浦野院次さん(桃園連合振興町会会長)
小西睦夫さん(東中川連合防災リーダー隊長)
コメンテーター：栗田暢之さん(特選)レスキューストックヤード代表理事)

開催日：2011年1月18日 / 会場：NEXT21ホール
主催：大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)

※肩書、所属等はイベント開催当時のものです。 2011.1.18

※取材内容等は2010年8月時点のもの。肩書、所属等は当時のものです。